

宮城教育大学 教育復興支援センター
メモリアルイベント



震災から5年

私たちはあの日を忘れない

2016年3月9日(水)~3月14日(月)



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター

宮城教育大学 教育復興支援センター メモリアルイベント

震災から5年 私たちはあの日を忘れない

2016年3月9日(水)～3月14日(月)

目的

震災から5年目の節目にあたり、東日本大震災を忘れないため、被災地視察研修やメモリアルフォーラムなどを開催する。

日程

3月9日(水)

被災地視察研修(石巻市立大川小学校)

8:00 宮教大発 ～ 17:00 宮教大着

3月10日(木)

被災地視察研修(仙台近郊・午後出発)

13:00 宮教大発 ～ 17:00 宮教大着

3月11日(金)

メモリアルフォーラム

場 所：萩朋会館2F交流・談話スペース

時 間：12:00～17:00

内 容：「あの日を忘れない～そなえも忘れない～」炊きだしプロジェクト
復興支援ボランティア学生のお話(愛知教育大学学生を迎えて)
追悼式典テレビ中継

14:46 黙禱

懇談会「活動を振り返ろう」(センター特任教授からのお話を含む)

3月14日(月)

仙台市立七郷中学校野球部生徒紅白試合
(本学グラウンド)

10:30～ トレーニング

13:00～ 感謝の会

13:30～ 紅白試合



1 被災地視察研修

被災地視察研修（石巻市立大川小学校・門脇小学校、女川町）報告

- 1 期 日 平成28年3月9日（水）8：00～16：45
- 2 研修場所 石巻市立大川小学校、女川町駅前商店街（シーパルピア女川）、女川町地域医療センター、石巻市立門脇小学校
- 3 参加者 本学学生7名 センター職員6名
- 4 活動内容

(1) 視察のねらい

津波による被災を受けた二つの学校の視察を通して児童の生命を守る防災教育の在り方について考えさせるとともに、女川町における津波の大きさや威力について実感し、その後の復興状況を観察させる。

(2) 石巻市立大川小学校、門脇小学校における状況について

大川小学校は、児童74名職員10名の犠牲者のあった学校である。一方、門脇小学校は、引き渡しの後に下校した7名の児童が犠牲になっている。今回は、具体的に実地踏査することにより、学生一人一人がその背景について思いをもつことを期待した。

大川小学校は海岸線から約4km離れ、門脇小学校は約700mの所に立地しており、海拔も1mを少々越える程度であった。また、両校の近くには距離の違いはあれ、1級河川である北上川、新北上川が流れている。

2016年3月9日 石巻市立大川小学校

地震発生後、門脇小学校は校長を先頭に在校生全員が校舎の北側にある日和山に避難している。日頃から、強い地震が発生した際は裏山に避難することになっていたという。一方大川小学校は、地震発生から津波到来までの約45分間、校地内に待機していた。両校には、共通して海岸線からの津波と河川の堤防を越えた津波が同時に押し寄せる状況になった。その結果、門脇小学校は流されてきた自動車のガソリンが発火し、津波火災により校舎が炎上した。校庭に避難し車内にいた人たちや周辺の住民には多数の犠牲者があったものの、前述のように当時在校していた全員の児童は無事避難することができた。



2011年4月15日 石巻市立門脇小学校

大川小学校においては、新北上大橋のたもとにある三角地帯に向けて避難を開始した直後に多くの児童及び職員が津波の犠牲になった。大川小学校は、地域の避難所となっていること（避難所と避難場所の違いとそれに対する一般的に認識について説明）、宮城県総務部危機対策課制作のハザードマップでは大川小学校のある釜谷地区は津波による浸水は予



想されていないこと（但し、どれほど住民が認識していたか不明だったことも触れる）。また、慰霊塔の碑に刻まれた犠牲者数に地区による違いがあること（釜谷地区は約4割の住民、海岸線に近い長面地区は約2割の住民が犠牲になったことを説明）などについて解説した。

さらに、指摘されている裏山への避難方法について、その山道が体育館北側に確認出来ることなどを実際現地に立って学生たちの目で確かめることを促した。

（3）女川町地域医療センター付近の被災状況と駅前付近の復興状況について

女川町は、人口の8.8%に当たる約880名の方々が犠牲になっている。発災から5年経った今、犠牲者も含め当時の人口の約37%の人たちが町外に流失している状況になっている。

まず、津波の大きさを実感してもらうために、女川町地域医療センターは海面より約17mの所に立地していたのにも関わらず、それを越える約18.8mもの津波が押し寄せたことをセンターの玄関の近くにある津波到達ラインを表示した柱で確認させた。従って、高台避難をしてきた住民の方々も、駐車場で車内にいたことや、フェンス沿いで津波の到来を見ていたために多くの人たちが犠牲になった所である。

また、既に解体撤去された「江ノ島会館」が横たわっていたことを写真で知らせた。4階建ての鉄筋コンクリートの建造物が横倒しになった理由について、現存する同じく鉄筋コンクリート造りの2階建て交番に基礎部分についている地中の基礎杭が残っていることから浮力による倒壊とされていることを知らせた。このことにより、津波の威力を感じ取ってもらった。



（4）女川駅商店街（シーパルピア女川）の状況について

女川町の復興のシンボルである駅前付近の見学をした。女川駅の再開とともに整備された地域である。平日にも関わらず、多くの視察者が買い物や食事に訪れていた。町内で被災した地域においてこの一部が活況を呈しているものの、回りを見渡せば山肌を切り崩して得た土砂を運ぶダンプカーがひっきりなしに行き来し、復興は道半ばであることを学生たちも実感したはずである。

石巻市、女川町を視察し、被災の大きさを改めて感じ取ったことを学生のレポートの中に読み取ることができた。復旧の槌音の響きも地域ごとに違いがあり、復興の進み具合に差があることも実感したようである。いずれにしても、子どもたち、そして地域の方々の一日も早い元の生活を取り戻せることを強く願った学生たちであった。



石巻・女川の視察を振り返って

学籍番号 E7023 氏名 齋藤 彩里

被災地を目の当たりにしたのは、今回が初めてでした。授業等で写真や映像を見ながら、話を聞くのと自分の足でその土地を歩いて、少し冷たい空気を吸って現地では話を聞くのでは全く違うなと感じました。2011年3月11日、その場にいた教師、児童が何を考えていたのか、自分がその立場だったらどう行動するか、考えを巡らすことができたのは、授業よりも今回の視察でした。多くの児童、教員が犠牲となってしまった大川小学校を視察しながら、自分が指示する側ならどうしていたか、何を思うか、想像しました。周囲の状況、安全性、色々なことを考慮して、少し遠い高地へ逃げることを選択した大川小学校の先生を私は責めることができないと感じました。それと同時に、この事例を決して無駄にはしてはいけないと思いました。地震が来た。津波がきそう。こないそんなの気にせずとにかく高い所へ逃げ続けること。そして何より、早く判断すること。最悪の状態を想像した行動が大切だと思いました。石碑をみて、この3才の子がもし生きていたら...小学校6年の子がもし生きていたら、今からいい高校生か...と思ったり、やりきれない気持ちでした。被災地は茶色とグレーの世界でした。立入禁止の文字があちこちに見える風景がとても寂しかったです。しかし、復興に向け、元気に働く女川駅の人々、製紙工場の煙を見て、私ももっとも毎日を大事に頑張ろうと思いました。貴重な経験をさせていただく機会をいただき、ありがとうございました。

石巻・女川の視察を振り返って

学籍番号 E7237 氏名 葛森 皐

今回、石巻・女川を視察して、あの大地震からもうすぐ5年が経つというのに被災地のことについて自分がどれだけ無知であったのかということを実感した。

授業やメディアで多く取り上げられている大川小視察では、実際に自分の目で周りの状況を見てみないとわからないことが多くあると感じた。話で聞いていた以上に、逃げていけば助かったといわれる山は大きく、簡単にのぼることができる山ではないという印象を受けた。その場に合った正しい判断とは一体何なのか考えさせられた。

女川は中心部は復興が進んでいるようにみえたが、津波にのまれて震災以前の人々の暮らしがわかるものは残っていないかった。

今回 実際に行ってみて、津波がどのくらいの力をもっていて、どのくらい大きな被害をもたらしたのかということは初めて足を運んだからこそ理解することができた。しかし震災以前の町の様子を知らない私にとって、津波のむごさや、恐ろしさを理解するには、もう少し以前の町の様子や人々の暮らしぶりを知らないとできないと思った。

被災地視察研修（荒浜小・関上中）報告

- 1 期 日 平成28年 3月10日（水）13：00～16：30
- 2 研修場所 浪分神社、仙台市立荒浜小学校、名取市立関上中学校・日和山
- 3 参加者 愛知教育大学学生等7名、本学生10名、他にセンター職員など12名 合計29名
- 4 活動内容

（1）ねらい

3月10日（木）午後1時から荒浜小学校・関上中学校方面の被災地視察研修を参加者29名で行った。今回の視察のねらいは、「仙台平野部における津波被害の現在と過去を調べる」として地理的歴史的視点から津波被害状況を観察することにした。

（2）浪分神社

はじめに、若林区霞目にある浪分神社を訪れた。海岸から5.5km離れた浪分神社は、慶長三陸津波（1611年）の津波の浸水域との境目に1702年に建てられたと伝わり、現在は更に500m内側に移動したところにある。今回の津波は仙台東部道路にせき止められ2km手前で止まったが、以前であれば津波浸水の可能性があったと言える。神社の存在は教訓としては生かされたとはいえない。



（3）荒浜小学校

次に仙台市立荒浜小学校に向かった。海岸から700mにあった荒浜小は、校長と町内会長などの連携で避難者319名全員を無事に避難させた学校である。訪問時に居合わせた技師さんに案内をいただき、1階2階の教室や職員室などを見学した。津波被害の大きさに一同衝撃を受けた。その後、海岸にある慰霊塔や新設された7mの防潮堤から、冬の太平洋を見下ろした。



（4）関上地区

塩釜・亶理線で南下し、名取市関上地区に移動した。この地区は南北に走る道路は津波の被害を受け、関上地区の5差路の車渋滞などで地区住民753名、内中学生14名が犠牲になった。1階に津波が押し寄せた関上中学校の校舎は取り壊しが予定されていて近くの道路が閉鎖されていた。津波が越えた約6mの高さのある日和山に登り、町並みの被害の状況とかさ上げが進んでいる復興の姿を視察した。日和山の足下に「地震があったら津波の用心」の警句が刻まれた昭和8年三陸津波の石碑を確認し、更に津波犠牲になった関上中学生の慰霊碑や関上地区の慰霊塔に足を運び、手を合わせた。



今回の被災地が初めてという学生が多く、津波被害の状況や被災地の現状を体感し、震災復興の一層の願いと学生自身が果たす役割や支援の重要性をについて強い思いをもって、被災地を後にした。

関上・荒浜の視察を振り返って

愛知教育大学

学籍番号 2140051 氏名 市川 莉奈

「視察を振り返って」という文章を書きたいと思うのだが、うまく言葉に表せぬというものが本音です。とても胸が苦しく、こみあげるものがあります。私は今回初めて被災地を訪れました。日本人として、将来教員になろうと考えている身として、東日本大震災について無知であること、あるいは、表面状のことが知らぬということ、とても恥じがあると考えたので、参加しました。正直、東日本大震災が起る直前の情景や、欠けた様子、子どもたちの姿を想像することはできません。私の想像と起る被害でした。特に小学校の視察のときに、5年前の津波がおよせたという水のラインがくっきりと残っており、当時の津波の勢いに驚きました。教室、給食室、廊下に土が張り付いて、私の知っている学校の姿と大きくかけ離れており、ただ立ちつくすしかありませんでした。私は、愛知県海岸付近に住んでいます。小学校、中学校も、海に近い場所です。関上・荒浜と同じように立地条件の場所に住んでいるにも関わらず、震災や津波について、深く考えていませんでした。荒浜の子どもたちを守る教員の執念、町の方との連携を夫も、私もきちんと災害のことを考え、向き合い、今回知ったことを発信していく必要性を感じました。

震災があつたから5年たつたが、まだまだ時間がかかると感じています。愛知県から自分のできることを探し、実践していきます。

関上・荒浜の視察を振り返って

学籍番号 E17063 氏名 西村 春香

自分が被災した南三陸町以外の被災地に行くのは初めてでした。いつも報道番組で見るよりも直接自分の目で見る方が当時の状況などがすぐ目の前で再現されるような感覚になりました。改めて震災の恐ろしさを肌で感じました。それと同時に「忘れてはいけない」「二度とくり返してはいけない」「後世に伝えていくのは私たちだ」という気持ち胸の中で強く響いていました。今回は、伊藤先生がおっしゃった「縦と横から被災地を見る」ということで、被災してしまった地域の土地について、地域の歴史についてを考えると被災地に対する見方がずいぶん変わったように思います。また、今後教員という立場になった時、上に述べた土地や歴史についてよく学び、それらを踏まえて、地域と密接なつながりを持った防災教育をしていかなければならないと思いました。このふりこに起きたことを二度とくりかえしてはなりません。その役割をその責務を果たさなければなりません。これを機に様々な地域について見つめていきたいと思いました。地域の歴史や土地の特色など、様々な視点で見つめていこうと思いました。

震災から早数年が経とうとしています。改めて自分の当時の様子を振り返ろうと思います。私は私なりに逃げずに向き合っていると思います。このような貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございます。

荒浜小学校ボランティア学生

初等教育教員養成課程 理数・生活系 数学コース 高橋 英里

3月11日、今年で140年間の歴史に幕を閉じた荒浜小学校の校庭で、地域の方々がそれぞれの思いを込めた1000個の風船を空に飛ばし、夜には音楽室で荒浜にゆかりのあるアーティストたちが音楽を奏でました。荒浜小学校は東日本大震災により校舎が被災、また周辺一帯が災害危険区域に指定されました。小学校として使用できなくなってしまった校舎は今年、小学校としての役目を終え、4月からは震災遺構として新たな役割を担っていきます。荒浜に住む高山智行さんは、3年目の3月11日から荒浜小学校で「HOPE FOR project」というイベントを卒業生の同志とともに企画し、毎年行ってきました。今年も、荒浜地区に新しくできた地下鉄東西線の荒井駅にて、地域の方々をお呼びして3月6日にトークイベントを開催しました。「荒浜について話す事によって、気持ちが癒される気がする。毎年3月11日に対する思いが違う。それぞれのタイミングで荒浜に向き合えるようになると良い」「荒浜小学校は自分たちを守ってくれた場所という思いが強い。ぜひ残してほしい。」などの声を聞くことができ、2日間を通し地域内外の人々が一体となり荒浜やそれぞれの未来について語り合うことができました。



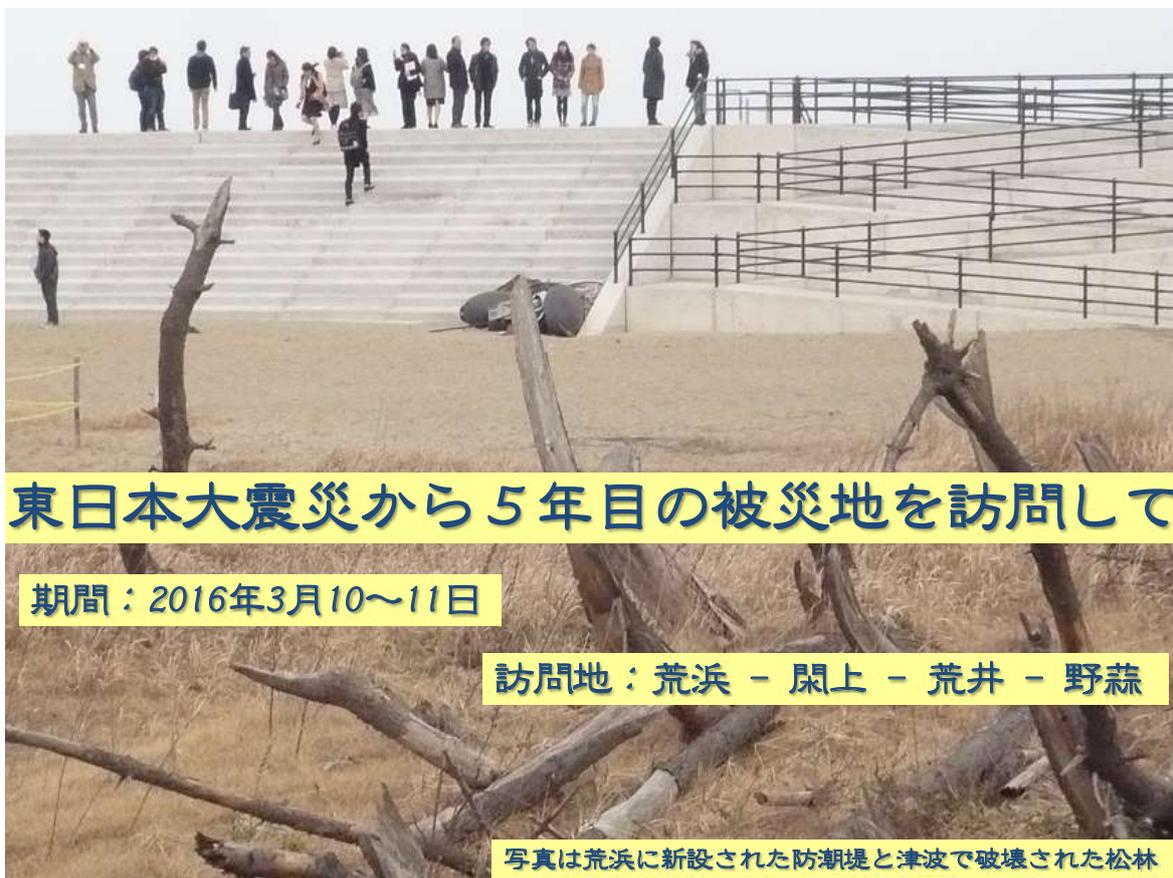
被災地視察研修

(荒浜小・関上中)

3/10 コメンテーターより

教育復興支援センター 前副センター長(平成25~26年度)

瀬尾 和大



東日本大震災から5年目の被災地を訪問して

期間：2016年3月10~11日

訪問地：荒浜 - 関上 - 荒井 - 野蒜

写真は荒浜に新設された防潮堤と津波で破壊された松林

東日本大震災から5年目の被災地を訪問して

〔2016年3月10日(木)〕

久しぶりに仙台の宮城教育大学を訪問し、午後からスタッフの先生方や学生君たちと一緒に津波被災地視察研修に同行させて頂いた。この視察研修には愛知教育大学の学生君たちも参加されている由、30人乗りのバスはほぼ満席となった。訪問先は若林区霞目の浪分神社、荒浜地区と、名取市の関上地区であった。荒浜地区はほとんど変化がなく、震災遺構として保存が決まった荒浜小学校では校舎の補強工事が行われていた。関上地区は嵩上げ工事の真っ最中で、土砂を積んだダンプカーがひっきりなしに走り回っていて、関上中学校には近づくことができなかった。津波で亡くなった関上中学の生徒14人の慰霊碑や、中学校の近くにあった仮設小屋“関上の記憶”は日和山の近くに移設されており、新たに名取市によって建立された慰霊碑には犠牲者990人の氏名が刻まれていた。帰路、関上五叉路で皆さんと別れ、関上小学校へと向かったものの、ここでも嵩上げ工事のために校舎に近づくことはできなかった。名取市のマイクロバス“なとりん号”で名取駅を経て仙台に戻った。

〔2016年3月11日(金)〕

午前中は地下鉄東西線の東端、荒井駅の周辺を歩いてみた。駅舎の一角に新設された“せんだい3.11メモリアル交流館”を訪問するのが目的であったが、付近に続々と建設が進められている瀟洒な戸建て住宅やマンション、震災復興住宅としての市営住宅、荒浜小学校がこの4月から合流することになる七郷小学校や七郷中学校、七郷小学校の前身である荒井小学校発祥の地である七郷神社、荒井小学校用地で仮設住宅などを次々に訪問し、近隣の方々とおしゃべりしているうちに、予定していた女川・石巻を訪問する時間がなくなってしまった。最後に訪問した仮設住宅は以前にも訪問したことがあったが、集会所におられた若林区まちづくり推進課職員の話によれば、一時は190世帯も入居しておられたのが、現在は19世帯を残すのみで、順次、復興住宅などへの移転が進められていること、残っている方のほとんどが独居であることから健康上の心配があってパトロールが欠かせないこと、5月9日をもって仮設住宅を閉鎖する予定になっているが、全員が出て行かれるまでは閉鎖できないこと等々のお話を伺うことができた。最後に荒井駅に戻り、メモリアル交流館に設けられた祭壇にお参りしてから仙台駅に向かった。

午後は女川・石巻を諦め、東松島市の野蒜地区を訪問することにした。これまでは代行バスを利用していたので、仙石線ごと移設された新しい野蒜駅で下車するのは初体験であった。駅前は大規模な造成工事中で、旧野蒜駅までは徒歩25分とのこと、まずは途中の野蒜小学校跡を目指した。野蒜小学校周辺には特に大きな変化はなかったが、2月末に建立されたばかりの閉校記念碑は心打たれるものがあった。仙石線の電車が津波で被災した場所のすぐ近くでは、作業場でタバコを吹かしておられた同年配の男性と話し込み、石巻で地震に遭ってから急速、軽トラックで帰宅し、その直後に自宅が津波に襲われたこと、家人はすでに裏山に避難しており全員無事であったこと、津波は1階の軒下まで来たこと、津波に流された電車の正確な位置、はては、高校時代に知り津波で被災した女川に今で云うボランティア活動に行ったことなど、話は際限なく続いた。旧野蒜駅はプラットホームの保存と共に、コンビニが併設された“野蒜交流センター”として機能しており、テーブルと椅子が置かれた休憩スペースの周囲には被災写真等が展示されていて、一角の観光案内所では宮戸島への奥松島遊覧や民宿の案内をしていた。この野蒜地区では、津波災害を何とか免れた住宅はそのまま居住することが可能であり、嵩上げをすれば新築も可能とのことであった。仙台駅では帰りの新幹線まで時間があつたので、改札口に近い“気仙沼の寿司屋”でにぎりトホヤの刺身、それに男山の冷酒；蒼天伝を堪能させていただいた。



校舎2階東から津波の到来方向を見る



仙台市若林区の荒浜小学校



津波襲来の痕跡を残す1階の教室



避難 Evacuation	多重防御 Multi-layered Defences	移転 Relocation
「逃げる」ことを重視し、避難の丘や避難施設、避難道路などを整備 Placing importance on fleeing, and developing evacuation hills, facilities and roads.	防潮堤再整備、防災林再生、県道かさ上げなどによる「多重防御による減災」 'Disaster Risk Reduction with Multi-layered Defences' by reconstructing coastal levees, reviving disaster-prevention forests, and raising prefectural roads	安全な内陸への集団移転による「総合的な防災対策」 'Comprehensive Disaster-prevention Countermeasures' by relocating inland to a safe place as a group.
断面図 Cross-section View		
最大クラスの津波の防御 Defence Against Largest Tsunami		
数十年～百数十年に一度の津波の防御 Defence Against Tsunami that Occurs Once Every Few Decades or Centuries		
市街地 Residential Area 仙台東部道路 Sendai Tobu Road	避難施設 Evacuation Facilities 仙道塩釜巨尾線 Shiogama-Watari Line Prefectural Road	公園(丘) Park (Hill) 海岸防災林 Coastal Disaster-prevention Forest 海岸防潮堤 Coastal Levee 砂浜 Sandy Beach 海 Sea
避難道路 Evacuation Roads	かさ上げ道路 Raised Roads	避難の丘 Evacuation Hill
貞山運河 Teizan Canal		
		
避難施設 Evacuation Facilities	かさ上げ道路 Raised Roads	避難の丘 Evacuation Hill

荒浜小学校の校門前に掲示されていた仙台市の津波対策の概念図



名取市閑上の日和山にて



津波被害の大きかった名取市閑上地区と日和山



日和山近くに新たに建立された名取市の津波慰霊碑





上の写真のお社の柱間隔が二尺五寸七分である理由？



閑上小学校と津波避難場所を示す案内板

名取市閑上の日和山に置かれていた
昭和三陸津波の『地震津波記念碑』

震嘯記念

地震があつたら津波の用心

昭和八年三月三日午前二時三十分突如強震アリ、鎮静後四十分ニシテ異常ノ音響ト共ニ怒濤澎湃來リ、水嵩十尺名取川ヲ遡上シテ西八猿猴園ニ到リ南八貞山堀廣浦江一帯ニ氾濫セリ浸水家屋二十餘戸名取川町裏沿岸ニ在リシ三十噸級ノ發動機漁船數艘ハ柳原園畑地ニ押上ゲラレ、小艇ノ破碎セラレタルモノ數カラザリシモ幸人畜ニハ死傷ナカリキ縣内枕生牡鹿本吉ノ各郡及ビ岩手青森兩縣地方ノ被害甚大ナリシニ比シ輕少ナリシハ震源地ノ遠ク金華山ノ東北東約百三十哩ノ沖合ニ在リテ濤勢ノ牡鹿半島ニ遮断セラレ其ノ餘波ノ襲來ニ過ギザリシト河口ノ洲丘及ビ築堤ノ之ヲ阻止シタルトニ因ルナリ震災ノ報一度天驥ニ達スルヤ長クモ、天皇皇后兩陛下ヨリ御救恤トシテ御内帑金ヲ御下賜セラル、聖恩ノ宏大ナルコト洵ニ恐懼感激ニ兼ヘザルトコトナリ惟フニ天災地變ハ人カノ豫知シ難キモノナルヲ以テ緊急護岸ノ萬策ヲ講スベキハ勿論平素用心ヲ怠ラズ豫ニ慮スルノ覺悟ナカルベカラズ茲ニ刻シテ以テ記念トス

昭和八年十一月三日

閑上町長 渡邊卓郎 篆額
從七位 駒八等 加藤忠藏 撰文
駒八等 赤松傳一郎 書

宮城縣本吉郡志津川町
石工 阿部清藏 刻



閑上中学校に置かれていた閑上中学生徒のための慰靈碑と『閑上の記憶』は嵩上げ工事のために日和山の近くに移設されていた



閑上の記憶に掲示されていた『3.11 追悼の集い』への参加を呼び掛けるポスター(上)と翌日実際に行われた追悼の集いで飛ばされた『メッセージ風船』(下、朝日新聞3/12より)



津波の犠牲になった14人の閑上中学生徒のための慰靈碑。碑の手前に野球のホームベースが置かれているのは犠牲者の1人が野球部に所属していたためで、碑の両脇の机には犠牲者全員に宛てたメッセージが書き込まれている。



地下鉄東西線荒井駅



震災復興住宅『荒井東市営住宅』



荒井駅に併設された“せんだい3.11メモリアル交流館”

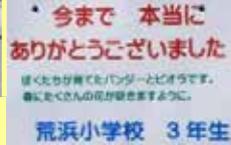


七郷中学校にかけられた“故郷復興プロジェクト”の横断幕

仙台市若林区荒井地区



荒井小学校用地定食仮設住宅と花壇に置かれていた荒浜小学校児童からの感謝のメッセージ



荒浜小学校 3年生



由緒ある七郷神社



東松島市野蒜地区



新しい野蒜駅のプラットフォームから旧野蒜駅を望む



新しいJR仙石線野蒜駅の駅舎



正門から見た野蒜小学校（校舎左手にあった体育館は跡形もなく撤去されている）



市の供用施設に残された津波高さの標識



野蒜小学校に残された津波高さの標識



野蒜小学校の校歌碑（左）と新しい駅校記念碑（右）

東松島市野蒜地区 (2)



旧野蒜駅から見た北側の住宅地（手前の空地は被災地跡）



仙石線の線路跡（道路の左側）と付近の居住者



旧野蒜駅のプラットフォームと駅舎（右手）

旧駅舎に残る津波高さの標識

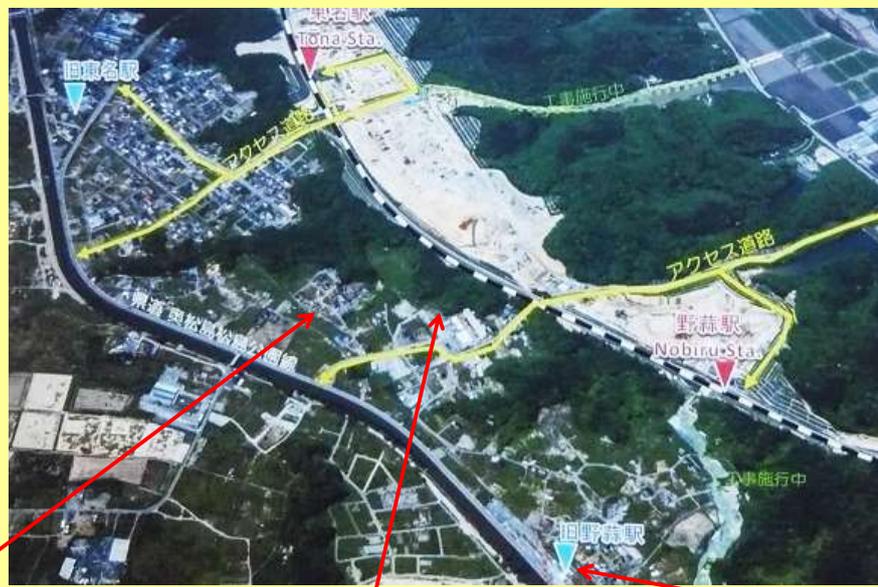


道路の部分だけに残された線路



被災したまま残された住宅

東松島市野蒜地区 (3)



旧野蒜駅に設置された“野蒜交流センター”に展示されている津波被災当時の写真



JR仙石線車両



野蒜小学校



野蒜駅

宮城教育大学 教育復興支援センター メモリアルイベント

メモリアルフォーラム

2016年3月11日(金)

場所

菫朋会館2F交流・談話スペース

時間

12:00～17:00

内容

12:00～13:00

・「あの日を忘れない～そなえも忘れない～」
炊きだしプロジェクト

13:00～14:00

・復興支援ボランティア学生のお話
愛知教育大学学生を迎えて

14:00～15:00

・追悼式典テレビ中継
・14:46 黙祷

15:00～16:00

・懇談会「活動を振り返ろう」
センター特任教授からのお話を含む

16:00～16:10

・閉会式

進行係 小田隆史特任准教授 & 藤原忠和主任

2 メモリアルフォーラム

「あの日を忘れない～そなえも忘れない～」炊きだしプロジェクト

拡大・復興カフェ in Miyakyo として実施してきた炊き出し研修の第3弾である。メニューは「1分パスタ!」。11:30～13:00の間に70人を超える人が参加した。「本当に1分でできるの?」と質問されたが、実際に体験すれば、すぐに納得してもらえた。事前にスパゲッティの乾麺を水に浸しておいて茹で時間を短縮する方法で調理している。

手順はとても簡単。(1) 乾麺100gに対して300gの水に浸しておく。麺の太さによるが、1.4mmで1時間、1.7mmで1.5時間、1.9mmで2時間程度である。そのままの長さでも良いが、今回は扱いやすくするために半分に折った。塩は入れなくてもよい。(2) 白色になったフニャフニャな麺を沸騰したお湯に入れる。いったん温度が下がるが、再度沸騰するのを待って約1分間で茹で上がる。お湯に入れるとすぐに黄色に変わるの、ちょっと感動的である。(3) 茹でた麺同士がくっつかないように、湯切りした麺を金属ボウルに入れてオリーブオイルで少し和えた。トングを使ってサララップで覆った小型容器に小分けして、用意した様々なドレッシングやマヨネーズをかけて和える。トッピングとして、かつおぶし、刻みのり、ごま、ツナなどをお好みで加えてオリジナルな味つけで完成、後は食べるだけである。

事前に水に浸す時間が長いような気がするが、水に浸す時間は長くても良い(スパゲッティの小麦の特長で飽和するため)。前日の夜や朝出かけるときに事前にジップロックなどに入れておくだけで良い。今回は、時間短縮のために鍋のお湯をやや多めにしたが、水は多くなくてもかまわない。水も少なく加熱時間も短い省エネの料理で、震災時のメニューとして適している。こんな簡単な調理方法にもかかわらず、沸騰したお湯で11分程度茹でる方法に負けない。むしろ、ちょうどいい感じに失敗せずに茹で上がる。水につけたままの状態でも冷蔵で3日間、水を切って冷凍すれば1ヶ月は保存できるので、普段の料理としても応用しやすい。

これまでに行った炊き出し研修もとても喜ばれたが、今回の方法は特別な道具が不要であり、自宅ですぐにできる。この研修の後、何人もの方から「自宅でやってみました。とてもおいしくて、びっくりしました!」と声をかけられた。「東日本大震災のときにも、スパゲッティを食べたね。」という声かけもいただいた。震災の時を思い出しながらも、楽しみながらできる炊き出し研修にできたのではないだろうか。今後のためにも、何らかの形で継承していけたらと思う。

(水谷好成：技術教育講座、小野寺泰子：家庭科教育講座、鶴川義弘・福井恵子：情報処理センター)



3 七郷中学校野球部感謝の会報告

- 1 期 日 平成28年3月14日（月）10：00～15：30
 2 研修場所 野球場、表現活動実習棟
 3 参加者 七郷中学校野球部員22名、顧問2名、部員保護者3名
 本学生（平田優輔・4年）松本次長・センター職員10名合計 38名

4 活動内容

(1) 学生コーチとしての支援

教員補助事業として行われた七郷中学校野球部への支援は、平田さんが学生コーチとして平成24年10月以降顧問の先生の指導の下、今年度まで3年半野球部員への技術指導などの支援を行った。支援のきっかけは、平田さんが夏の学習支援に参加したあと、もっと支援を続けたいとの申し出があり、センターから校長先生にお願いして実現したものである。



2013.4.20 練習試合の時の平田さんの審判姿

(2) 感謝の会

感謝の会は、10時30分より表現活動実習棟で開催された。感謝の会は、当センター及び本学生平田さん（4年生）の支援に対して七郷中学校野球部員が感謝の気持ちを表すねらいで開催され、松本次長、野澤副センター長などが参列した。2年野球部長が当センター及び平田さんへの支援に対する感謝の言葉を述べ、また平田さんも支援活動を通しての思いを述べた。最後に、副センター長から感謝の会の御礼と七郷中学校野球部員の今後の活躍への励ましの言葉が述べられた。

(3) 校内試合

11時から本学野球場で、1・2年生対3年生の紅白試合が行われた。3年生9名は中学校最後の練習となり、回毎にポジションを変えながら、笑顔で後輩へ力強い勇姿を示していた。13名の1・2年生は、先輩の野球に対する熱い思いを受け止めながらの最後まであきらめずに挑戦していた。試合は大接戦で素晴らしい試合であった。3年生の保護者3人が応援に訪れ、大学や顧問の先生そして平田さんの計らいに感謝の言葉を述べていた。15時過ぎに試合が終了し、グラウンド整備をして元気なあいさつをして帰宅についた。



七郷中学校野球部での活動を終えて

特別支援教育教員養成課程 発達障害教育コース 平田 優輔

振り返ってみると、七郷中学校野球部での3年半はあまりにも早く過ぎ去ってしまった。けれども、これまでの日々は間違いなく私の人生の大きな財産となった。大学1年生の秋に「野球で復興にかかわれませんか？」と何の計画もなく思っただけで駆け込んだ私に、温かく対応してくださり、活動の場を提供してくださった復興支援センターの方々には感謝してもしきれない。常に活動を応援していただき、報告に行くといつも笑顔でセンターの皆様が私の話を聞いてくださったことで、私は自信を持って活動に取り組むことができた。野球部としては今回宮教大グラウンドで野球をやらせていただいたのは2回目となり、他にも野球道具の寄付など、復興支援センターからは多くのサポートをいただいた。そのおかげで今では何不自由なく、子どもたちは野球に打ち込んでいる。継続的な温かいご支援に子どもたち共々感謝いたします。

好きな野球で子どもたちとかわかれる。それだけでとても幸せなことであり、その上、学校現場に入り、先生方からご指導をいただき、保護者の方々の思いを聞くという学生では得難い経験をさせていただいた。七郷に来て、多くの人とかわかり、人と人がつながるのは心であると強く感じた。私たちはプロ野球選手を育成しているわけではなく、子どもたちもスポーツで食べていくわけではない。部活動を通して何を学ぶのか。部活動が終わったときに何が残っているのか。それが最も大切だろう。子どもたちは部活動を通して、人とのかわかりを学び、努力することの辛さや楽しさを知り、社会の中で生きていく力を身につけていく。相手のことを理解したい、どうかして人の役に立ちたい、これらは野球云々の話ではなく、生きていくのに重要な力である。子どもたちが人として大きくなっていく瞬間に立ち会えるこの仕事はなんて楽しいのだろうか。七郷中学校野球部に入り、部活動には大きな教育的意義があることを理解できた。子どもたちのためにとやってきたつもりだったが、子どもたちに成長させてもらった3年半だったと思う。

あの日から5年が過ぎた。復興には目に見えるものと目に見えないものがある。現在、七郷地区には地下鉄が走るようになり、住宅や商業施設等の建設が続き、地域の利便性は高まり、人やモノが集まり、復興を遂げつつある。地域の発展の中でぼんやりしていると、あの日や当時の思いを忘れてしまいそうになる。ボランティアとして七郷中に入ったときには何のためにやっているのか、まだ明確なものではなかった。しかし、今なら胸を張って言える。子どもたちの成長は日本の未来そのものである。そこにかかわれたことは間違いなく復興につながる。子どもたちは私たちが気付かぬうちにもものすごい勢いで成長していき、あっという間に巣立っていく。寂しさはあるが、それ以上にドキドキする。これからどんな力をつけ、どんなに活躍してくれるのだろうか。もっとかっこいい大人になっていくのだろうか。学校生活や部活動で身につけた力をさらに磨き上げ、より眩い光を発してくれるはずだ。だったら私も負けてはいられない。そんな子どもたちが仙台、東北、日本、さらには世界を舞台に羽ばたいていく。確かに復興はまだまだだ。しかし、そうやって現在から未来へと思いをつないでいけば、復興も決して遠い話ではないだろう。今後は教員として希望の架け橋をつなぐ手伝いをしていければ嬉しい。未来を担う力強い子どもたちがたくさんいる。10年後、20年後、さらにはその先の、これからの未来にワクワクする。きっと、日本の未来は明るい。

仙台市立七郷中学校野球部を迎えて

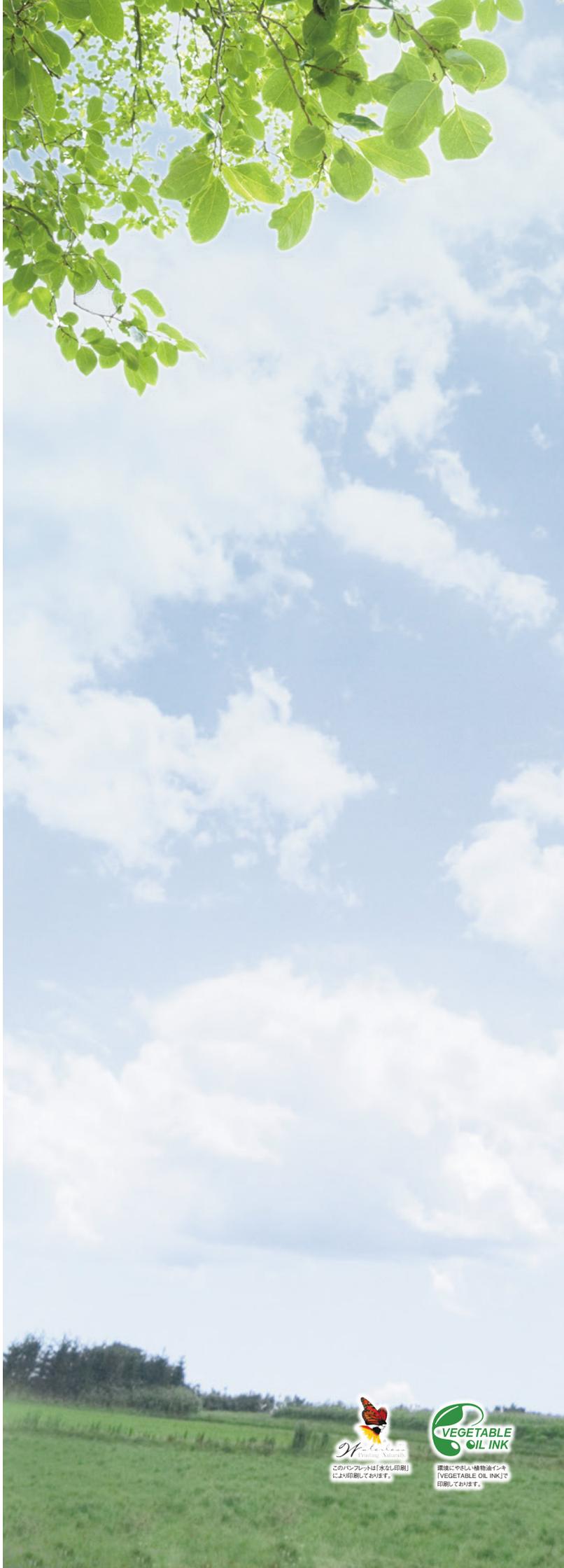
教育復興支援センター 特任教授（元仙台市中学校長会 会長） 庄子 修

会場に入って、驚いた。精悍な面構えと、はち切れんばかりの若さと初々しさを内に秘めた中学生たちが、背筋を真っ直ぐに伸ばし、きちんと整列している。ピーンと張りつめた空気の中、「感謝の会」は、これまで4年間、部活動への支援を続けてきた教育復興支援センターに対する顧問の先生からの感謝の言葉から始まった。聞いている生徒たちの瞳は、眩しいほど輝いている。続いて、2年生の部長からの御礼の言葉があった。先生の指導もあったとは思いますが、部長が話すその言葉の一つ一つからは、感謝の思いの深さが伝わってきた。それを受け、野澤副センター長が、被災地というハンディを乗り越え、頑張っている中学生への労いと励ましの言葉を贈った。久しぶりに子どもたちの前に立つ副センター長は校長時代に戻ったようで、その目は慈愛に満ちていた。これまで指導に当たってきた本学4年生の平田さんからは、「教え、指導するつもりで始めたが、気が付くと自分が多くのことを学ばせてもらい、成長できた」との話があった。中学生にとって身近な、そして憧れの存在である平田さんの言葉は、きっと心に染み入ったに違いない。最後に花束の贈呈を受けて、ひとまず「感謝の会」のセレモニーが終了した。

中学生が、室内でウォーミングアップをしている際に、顧問である守屋先生からお話を聞くことができた。あの震災で、仙台市内の中学校では唯一、七郷中の生徒が2名犠牲となった。そのうちの1名は野球部の先輩だったという。その思いを胸に、これまで頑張ってきたということであった。

室内でのウォーミングを終えた生徒たちに、本センターの伊藤芳郎特任教授から、次のような話があった。「人が力を発揮できないのは、やらされている時。一方、力を発揮できるのは、自分のためというよりも人のためにやろうとする時。」この奥の深い話に、中学生たちは真剣なまなざしで聞き入っていた。

午後からは、本学の野球場で1、2年生対3年生の親善試合が行われた。2日前に卒業したばかりの3年生の表情は、とても伸びやかだった。それがプレーにも表れており、機敏な動きの中で、ファインプレーが続出した。グラウンドに立つのは数か月ぶりだとは、とても思えないほどだった。試合が動いたのは、そうした3年生が連続ヒットで1点をもぎ取った5回の表。会場に駆けつけていた3年生の保護者だというお母さん方3名。その応援の声も弾んでいる。圧巻だったのは、最終回。3年生は満を持してエースがマウンドに上がり、もの凄いスピードのボールが、パチン！という乾いた音を立ててキャッチャーミットに吸い込まれる。これでは1、2年生はとても打てないだろう。そう思っていた矢先、ヒットが生まれた。さらに下級生を気遣ってのエラーなども絡み、気が付くと、ノーアウト満塁。一打逆転サヨナラの場合。どうなるのかと、息をのむ中、下級生のバットが快音を残して火を噴いた。大声援の中、まず一人がホームイン。そして、二人目がホームに駆け込もうとするその瞬間、ライトの深くまで転がったはずの白球が、3年生の見事な連携プレーでキャッチャーまで戻ってきたのである。判定は、・・・アウト。本当に見応えのある試合だった。結局試合は1対1の引き分けに終わったが、先輩の胸を借りて本気になって向かっていった1、2年生と、その思いをしっかりと受け止めて下級生にバトンを託した3年生の姿は、とても清々しく、どちらにも大きな拍手を贈らずにはいられなかった。指導にあたってきた、顧問の高橋先生と守屋先生、そして、本学4年生の平田さんにも、大きな拍手を贈りたい。そして、何よりも、被災地にあって様々な困難にも負けず、前向きに野球に取り組んでいる七郷中の生徒の皆さんに万感の思いを込めて拍手を贈りたい。この生徒たちなら、将来きっと被災地の復興を成し遂げてくれるに違いない。



宮城教育大学 教育復興支援センター
メモリアルイベント

震災から**5**年
私たちはあの日を**忘**れない



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

TEL 022-214-3296

E-Mail : fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp



このパンフレットは「水なし印刷」
により印刷しております。



環境にやさしい植物油インク
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。